第２　教育研究団体の意見・評価

○　日本独文学会　ドイツ語教育部会

（代表者　草本　晶　　会員数　約450人）
ＴＥＬ　03-5950-1147

１　前文

（本試験の評価書に同じ。）
試験のバランスを見るために，追・再試験問題は同年度の本試験と比較する。

２　試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

本年度の追・再試験は，大問構成（１～６），設問形式，総設問数（29），総解答数（48），配点のいずれも本試験と同一であった。発音・アクセント問題はなく，文法知識を問う設問が大問１・２に限定される点も本試験と共通している。

追・再試験で扱われた長文のテーマとジャンルは，ベルリンに住む友人と出かける会話文（大問３），文化学の紹介動画の内容と学生のメモ（大問４），欧州の家族形態の変化を扱う説明文と統計資料（大問５），世代の概念と世代間の偏見に関する論評（大問６）などで，本試験と同様，実用的・日常的な場面から社会・文化的なテーマまで多岐に亘る。本試験以上に学術的・社会的なテーマが深く掘り下げられた内容であるという印象も受ける。

ドイツ語総語数（のべ語数）は2,524（固有名詞を除くと2,447），総語彙数（単一語の初出回数）は670である。本試験は総語数2,830（固有名詞を除くと2,576），総語彙数678であった。本試験と比較すると，総語彙数は同水準である。昨年度の追・再試験の総語彙数（635語）から大きな変動はなく，基本語彙を中心に出題されていることがうかがえる。本試験との比較では，文章量は同程度である。この傾向は，受験者が既習語彙の範囲内で量のある文章を読む力がより重視される方向に作問されたことを示唆し，文脈把握力・推論力・情報整理力に重点が置かれているという本試験の傾向と一致する。

本評価で使用している過去の出題語彙データベースに蓄積している語，一般的独和辞典（見出し語６～８万語程度）で基礎語彙として扱われている語，基礎語彙を組み合わせた合成語，固有名詞，国際語，注付きの語，派生語のうち形態素の意味からその意味が容易に想像できる語などを除くと，やや難度が高いと思われる語の数は13語であった（★）。

★ Alleinerziehende, ausstammen, Berufsfeld, Hundeauslaufgebiet, Hundehalter, Informationsdienst, Kinderbetreuung, Lebensabschnitt, Lebensbereich, Ostalgie, Prozentsatz, Schutzgebiet, Wertvorstellung

本試験では難語と思われる語は11語であり，追・再試験とほぼ同じであった。難度が高い語には注が付けられている点は本試験と同様であり，出現回数も１回のみであるため，多くの場合は意味が分からなくても解答にはあまり差し支えない。いずれも文脈・注釈・造語の知識，図表やメモにより意味推測が可能であるため，解答上の大きな妨げとはなりにくい。本試験に比べてテーマの専門性が高まっていた一方，語彙自体の難度は類推可能な範囲に抑えられており，受験者の負担に配慮した出題であったと評価できる。

追・再試験は本試験と同様の形式・分量で実施されたが，語彙難度が抑えられ，図表が増えたことで，受験者が複数の情報を統合しながら理解できるよう工夫されていた。

以下，大問ごとの評価を記す。

第１問　本試験と同じく，設問数（２），解答数（11），頁数（２），配点（33），テクスト中に空欄 1 ～ 7 と下線を引いた単語（ア）～（エ）が埋め込まれている。

テクストは，旅についての考えを述べたコラムである。本試験の第１問（街の紹介文）が比較的平易だったことと比較すると，テクストに関しては追・再試験の方がやや硬い印象を受ける。しかしながら，問われているのはいずれも基本的な知識であり，本試験とのバランスは妥当である。

問１　九つの語群から，テクスト中の空欄 1 ～ 7 にあてはまる語を選ぶ。語群には，動詞，接続詞，代名詞など，様々な語が含まれている。

空欄 1 は，後にzu不定詞句が続くことに着目して，⑧darinを選ぶ。①dafürと迷う可能性があるが，こちらは別の空欄の正答なので，最終的には正しい答えを選ぶことができる。

空欄 2 は，前の段落を受けていることに気がつけば，容易に正答①dafürを選ぶことができるだろう。

空欄 3 は，es gibtという，読解にも会話にも頻出する，基本的かつ重要な知識を問うている。

空欄 4 は，zwar…，　aber…　という呼応表現を知っていれば容易に解ける。

空欄 5 は，直後の名詞化された形容詞Interessantesを見れば，迷うことなく④etwasが入ると判断できるだろう。

空欄 6 は，受け身の助動詞として⑤werdenを選ぶ。関係文の語順と受動文の理解が同時に問われており，やや難度が高い。

空欄 7 は，主文の定動詞として②wirdを選ぶ。副文が先行する場合の主文の語順に注意しながら，主文の主語がdass文であることに気づく必要があり，やや難度が高い。

問２　テクスト中の下線を引いた単語（ア）～（エ）の語尾として適切なものを選ぶ。

空欄 8 は，定冠詞の変化を問うごく基本的な問題だが，zu不定詞句の語順を理解している必要がある。

空欄 9 は，Bücherにかかる関係代名詞として⑦-ieを選ぶ。文章を読むために必要な，基本的な知識である。

空欄 10 は，複数３格の名詞Bücherにつく⑧-nを選ぶ。作文などをする際には見落としがちだが，問われて答えるのは簡単だと思われる。

空欄 11 は，定冠詞類solchの語尾を選ぶ。知っておいて欲しい知識であり，出題の狙いも明確である。

第２問　設問数（３），解答数（６），頁数（２），配点（18）であり，出題形式は本試験と同様である。本試験と比較すると，上級者レベルの表現やドイツ語構文の知識が求められ，難度は高くなったといえる。

問１　可能の受動を表す sich　lassen＋不定詞構文の知識および nicht の位置づけを理解しているかが問われており，設問の難度は高いと考えられる。

問２　als ob＋接続法２式を用いた仮定法表現と従属節の語順を理解しているかが問われている。本設問の難度も高いと考えられる。

問３　まず，du に対する命令文であることに気づき，分離動詞と前置詞の組み合わせ aufpassen（＋auf 目的語）および an etwas gewöhnt sein の表現，zu のあとには分離動詞 einsteigen ではなく nehmen が適切であることに気づけるかも問われている。日常的な表現が問われているものの，問題に含まれている複数の文法項目は難度が高いと思われる。さらに，日本語

文とドイツ語文では文末が異なっていることも気になる点である。

第３問　連続性のある会話の解釈を問う形式である。頁数（６），設問数（７），解答数（８），及び配点（40）であり，本試験に比べて１頁少なくなっている。また，イラストは本試験から１点少なくなったが（２点），効果的に使用されている。問題文では，Melanie が，弟 Leo を連れて友達の Tina と湖畔の森へ出かける場面が取り扱われている。日常生活での場面が取り上げられ，状況は高校生にも想像しやすい。

問１　Melanie がなぜ Leo を連れてきたかを会話の流れから把握し，Tina が Leo に何がしたいかを尋ねていることが理解できれば，正答を選ぶのは難しくない。

問２　四つの選択肢にはどれも nicht（または nichts）が入っている。①nicht schlecht は口語表現でよく使われるので，下線部の toll と同じ意味になることは推測しやすい。

問３　三人の行先をイラストに記された選択肢の位置から特定する問題である。最初の会話文の後半部分から，目的地が湖畔であることや，Westkreuz から電車で１駅移動した後に徒歩で向かうなど，移動手段も見極めなくてはならない。イラストを効果的に使用した問題である。

問４　本文の下線部と同じ意味の文を選択肢から選ぶ問いである。単語 ehrlich の意味が分かれば，正答以外の選択肢を排除できる。

問５　一連の会話の後に三人で何をしたかを読み解く問題である。会話文の最後の部分を注意深く読めば，正答を導くことができる。

問６　看板の絵のうち，本文で話題にならなかった事柄の組み合わせを選択する問題である。本文を見直せば回答できるものの，やや難度は高い。

問７　会話全体の内容に合うものを二つ選択する問いである。会話の流れを適切に把握していれば正答を選び出せる。しかし，正答の選択肢は二つとも，最初の会話文の内容を扱ったものなので，後半の会話文からも正答の選択肢を出すほうがバランスが取れていたと思われる。

第４問　設問数（５），解答数（８），頁数（６），配点（30）であり，出題形式は本試験と概ね同様である。場面設定は，学生 Yuki が文化学に関する情報を集めるため，教授と学生４名が会話しているインターネット上の動画を視聴しているというものである。本試験と同様に，連続性のある会話や学生が取ったメモが組み込まれている。一方，追・再試験では，発表スライドの選択を求める形式ではなく，生成 AI による動画要約を扱う設問や，発表原稿内の空欄を補完させる設問が含まれた。動画視聴という設定や，生成 AI に動画の内容を要約させる場面など，学習環境を反映させた問題の構成は興味深い。一方で，研究関連の専門用語が一定数出現し，本試験と比較して難度はやや高いと評価する。

問１　会話内容の理解を問うものである。本試験と異なり，会話に登場した語彙の言い換えを選択するのではなく，会話の流れに合う語彙を選択しなければならない。会話を丁寧に読み解くことができれば，正答に辿り着くことができる。

問２　会話内に登場する Wie beeinflussen globale Prozesse ... Einfluss auf die deutsche Esskultur の繋がりを理解できていれば，比較的容易に正答を選ぶことができる。

問３　選択肢と会話の内容を照らし合わせると解ける問題である。正答である A: Ostalgie を含む選択肢は①のみであり，選択が容易である。そのため，A: Ostalgie を用いた設問をもう一つ追加しても良かったのではないだろうか。

問４　文化学の特徴として会話の後半に登場しない内容を含む選択肢を消去すれば，正答を導き出せる。

問５　会話の内容を適切に理解したうえで，空欄が設けられた文の意味内容に合う表現を含む

選択肢を選ぶ必要がある。出題されたテクストの理解力と表現力の双方を問う良問である。

第５問　設問数（６），頁数（５），配点（35）。本試験（設問数（６），頁数（６），配点（35））より１頁減っているが，これは図表のサイズが小さくなったためだと考えられる。

出題は，１頁分のテクストと，これに関連した二つの資料で構成される。前者のテクストでは，„nicht eheliche Kinder“（未婚状態で生まれた子供たち）の社会的な受容を軸に，婚姻や家族に対する考え方が，時間的な変化，国ごとの違い，東西ドイツの比較と論点を変えながら簡潔に述べられている。受験者の多くは未成年だと思われるが，家族観の変化やライフプランニングは授業の内外でよく取り上げられるトピックであるため，十分に理解できるだろう。全体として複雑な構文は見られず，丁寧に読み進めれば十分に内容が読み取れる，適切な難度である。また五つの語に注がついているが，問題を解く上では障害にならず，語彙の選択も総じて妥当であると言える。

一方で，テクスト（285語）は，本試験（144語）の２倍の分量がある。さらに，東西ドイツの差異については予備知識が理解度を左右すると思われることから，本試験のテーマ（余暇時間におけるインターネット利用）と比較すると，難度が高いと言うべきであろう。

問１　ヨーロッパの状況について述べた文として，本文と合致するものを選ぶ。「本文の内容を踏まえて」と書かれているが，選択肢はいずれも第一段落の内容に関係している。消去法で正答を選ぶことはできるが，第一段落の主たる論点ではない部分が問われていることに，やや違和感を覚える。出題方法を工夫することもできるのではないか。

問２　資料１の内容として適切なものを，六つの選択肢から二つ選ぶ。選択肢を資料と照らし合わせていけば，正答以外を明確に排除できる。

問３　資料２の内容として適切なものを選ぶ。本試験の同様の問いでは，選択肢にある分数と資料中のパーセンテージを比較するために多少の計算が必要だったが，追・再試験ではそのような選択肢が減少している。

問４　家族を取り巻く状況について，正しく説明しているものを選ぶ。選択肢は日本語で書かれているが，テクスト全般に目配りしなければならず，理解度をはかる良問である。

問５　本文の内容に合致するものを選ぶ。問４と似た設問にも思われるが，選択肢にはテクスト中の単語がうまく散りばめられており，丁寧な読みが要求される。

問６　テクストのタイトルとしてふさわしいものを選ぶ。正答は③Familienformen in Europa－früher und heuteである。テクストを簡潔に要約させるという出題の意図は明確だが，ドイツ国内の東西格差を含むテクストのタイトルとして「ヨーロッパにおける家族形態－過去と今日」が適切と言えるかどうか，やや疑問が残る。消去法で正答にたどり着くことはできるが，選択肢または問いに工夫が必要ではないだろうか。

第６問　設問数（６），解答数（８），頁数（４），配点（44）と本試験と同じである。テクストはドイツにおける世代間の摩擦についての議論であり，ドイツの現代社会を題材にしている点でも共通している。本試験との比較で語数もほぼ同等であるが，追・再試験においては年代や世代の名称が繰り返し登場し，内容的にも日本社会の現実と共通する事柄が多く，やや読みやすい印象がある。テクスト理解には社会や経済に関わる語彙力が重要になるが，英語から類推できるものも多い。以下各問についてコメントする。

問１　本試験はテクスト全体の理解を問う設問だったのに対し，追・再試験では戦後の各世代を説明した第一段落の理解を試す問いになっている。テクスト中のIndividualistenなどの名詞が，選択肢のindividualistischなどの形容詞に対応していることに気付くことができれば，比較的容易に正答を導き出せる。

問２　下線のDas Ergebnis dieser Analyseの内容を問う設問で，...hat keinen Zusammenhang, ...steht im Mittelpunktという表現の理解が正答を導き出す鍵になる。

問３　各世代の特徴を論じる際に重要な要素とされるsozialen Status,religiöse Orientierung, Genderfragenの意味を問う，語彙力を試す問いである。

問４　下線部㊺の例を本文中から探し出し，その内容に一致した選択肢を選ぶ。テクストと選択肢の文を正確に理解する必要がある。難度は高いとは言えないものの，正答を見つけ出す過程に時間がかかる問いであるといえる。

問５　本試験同様，テクスト全体の理解度を試している。難度も同等といえる。

問６　本試験同様，タイトルを選ばせることで，テクスト全体の理解を問う狙いが明確である。

３　総評・まとめ

令和８年度追・再試験『ドイツ語』は，問題構成・配点・設問形式において本試験との整合性を保ちながら，語彙負担を適切に抑え，文脈理解や情報整理の力を測定する方向で作問されていた。長文のテーマは高校生にも理解しやすい内容を中心に構成されており，会話文，講義動画，統計資料，評論文など，複数のメディアを組み合わせることで，実際の言語使用に近い場面が設定されていた。追・再試験においてはイラストが思考を助けるために効果的に用いられており，視覚情報と内容を総合的に理解する能力を問う構成となっていた点は，高く評価できる。

一方で，本試験同様，総語数が多い中で複数の資料を照合させる設問が続くため，受験者には相応の速読力と正確な判断力が要求された。昨年度に比べて本試験の平均点が大幅に下落したことを踏まえれば，追・再試験においても時間的な余裕は決して大きくなかったものと推察される。

総じて本年度の追・再試験は，語彙を過度に難しくせず，読解能力を適切に測る内容となっていた。学習指導要領が求める能力を測定しようとする意図がうかがえ，総じて適切な作問であったといえる。今後も受験者が日頃の学習成果を発揮でき，大学での学びへと繋げられるような試験であることを期待したい。